

マルチベンダーで 自由度に富む ライブIPプロダクション システム構築を支援

放送設備にIP化の波が押し寄せる中、最適なシステムインテグレーター（SIer）としてにわかに注目を集めているのがオタリテック株式会社だ。ある放送局向けに整備したブロードキャスト・コントロール・システム（BCC）を軸としたIPプロダクションシステムは高い評価を得ており、今後のIP化進展におけるカギを握るSIerとして期待されている。

（レポート：高瀬徹朗・本誌ライター）

IPならではの強みを生かす

オタリテックが最も重視するのは「IPならではの自由度と汎用性の高さを生かす」ことだという。「安定面で優れた性能を誇るSDIの概念を基にIPプロダクションシステムを構築しようとする、最大の特長である自由度や汎用性を生かすことができない。IP本来の強みを生かしつつ、メーカー系SIerのような機器縛りのない、マルチベンダーに対応したSIerを目指して、現在の部門を立ち上げてきた」（オタリテックIPシステムソリューション部部長・佐藤威紘氏）。

従来のSDIをベースとしたシステム構築では、自由度の高い海外製品は選ばれにくい。そんな中でオタリテックが今日ほどの実績を上げることができたのは、海外の放送事業者を中心に高い評価を得ている独LAWO社製品のブロードキャストコントローラ「VSM」を取り扱ってきたことに加え、システムを構築する放送局側から一定の評価と協力関係を得ることができたからだという。「ユーザー様との『二人三脚』。自由度の高いIPプロダクションシステムによって『何をやりたいのか』を明確に示してもらうことで、我々はそのお手伝いという形でシステム構築を進めている」（佐藤氏）。

まずは「理解を深めてもらう」こと

これまでベースバンド技術で運用してきた放送局の技術陣から「二人三脚」と言い切るほどの協力を得られたのはなぜか。そのあたりについて、システム構築を担当した

IPシステムソリューション部ソリューションエンジニア・石橋浩平氏は、「SDIとの違いを理解してもらった上で、IPシステムによるメリット、IPだからこそ『できるようになったこと』の利点を深く認識してもらえた」と振り返る。

そのIPの利点を支える存在として、オタリテックが提案したLAWO社のBCCである「Virtual Studio Manager」（VSM）のパワフルな機能性がある。さらに、このBCCの安定性を生かしてバックアップシステムをIPで構築することで、「オールIP」化に踏み込んでいったのである。また、これまで別々に制御していた各種周辺機器をまとめて制御できたり、SDIにはなかった機能性や拡張性の数々がユーザー側に「IPのメリット」として受け入れられたりしたことが大きいと説明する。

同じく現場を担当したIPソリューション部プリセールスエンジニア・折笠基城氏も「例えばIPゲートウェイについても、従来は必要だった各種ハードウェアを一つのボードにまとめたことで、わずか3Uラックの省スペース化を実現でき、IP化のメリットをシンプルに受け入れていただけたと思う」と話す。

機能性に加え、コスト面、省スペースなどのメリットをしっかりと提示し、IP化のメリットについての理解を深める。シンプルながら実に効果的な提案だ。

「弊社は、マルチベンダーで取り扱うことができる立ち位置にあり、フットワークが良い。この強みを生かしつつ、放送局のIP化進展の力になれば」と佐藤氏は力を込める。

そのために、BCCへの登録やProduction Networkへの参加などができるLAWO「HOME/HOME APPs」など、進化著しいIP製品の最新動向を的確に把握するためのアンテナを張り、広く情報を集めている。LAWO社に捉われることなく、例えばインカム製品のリーダー的存在であるRIEDEL社であったり、IPシステムの設計に必要な監視やネットワーク、制御などを扱う多くのメーカーと関係性を深め、広い技術視点で把握するように努めている。

オタリテックは、常に「ユーザーの最適」に即した提案を続けられる準備を整えているのである。

